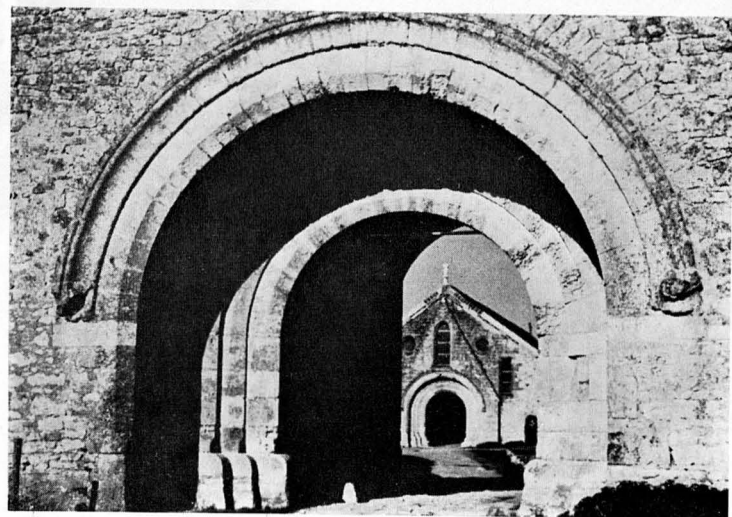
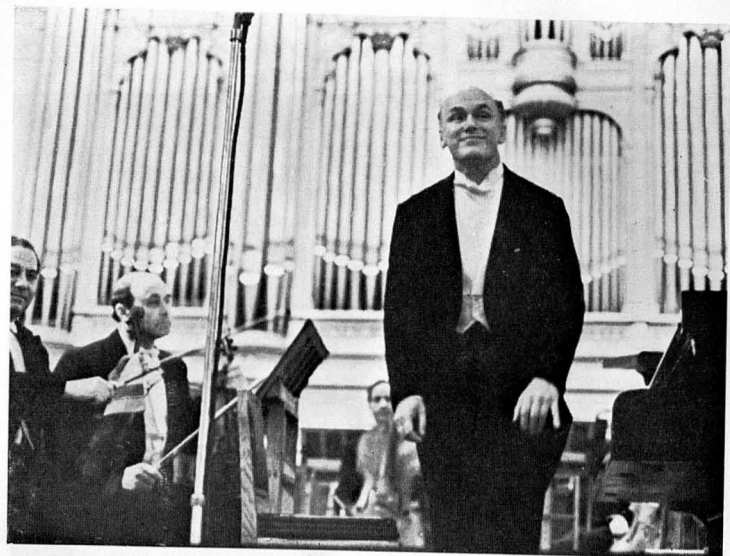




メレイの納屋

小野 光子 編
佐川 吉男

幻のピアニスト
リヒテル

朝日出版社



ピアノをひくプロコーフィエフ (1943年)

目次

第一部 リヒテルの芸術の秘密

プロコフィエフの思い出(リヒテル・小野光子訳).....三

- | | | |
|-----------|----------------|-------------|
| 1 第一の出会い | 2 モスクワ | 3 新しい関係 |
| 4 ソナタ第六番 | 5 第五コンチェルト | 6 ソナタ第七番 |
| 7 ソナタ第八番 | 8 フルートソナタとアフマー | |
| トヴァの組曲 | 9 ニコリーナ・ガラ | 10 もう一つの出会い |
| 11 病氣 | 12 六十歳 | 13 チェロ・コンチ |
| 14 エルト第二番 | 偉大な音楽家 | |

——ピアノリストたちより——

スヴァトスラフ・テオフィロヴィッチ・リヒテル.....四三
(ラヴィノーヴィッチ・小野光子訳)

- | | | | |
|--------------------------|--------|-----------------|---------|
| 訳者前がき | 1 その出現 | 2 彼の才能 | 3 演奏の傾向 |
| 4 ハイドン、シューマン、ドビュッシー、ラヴェル | 5 創造過程 | 6 ふたつにしてひとつなる彼の | |

個性	7	その生い立ちと彼の多才さ	8
しての道へ	9	彼の音楽	

——ピアノリストたちより——

ゲンリヒ・グスタヴオーヴィツチ・ネイガウス		二九
(ラビノーヴィツチ・小野光子、松岡節子訳)		

1 出現	2 炎のように	3 “憑かれた”人
4 即興性	5 ロマン性	6 ポエジー
7 幼年	8 教養と知性に満ちた個性	9 彼の矛盾
10 ピアノ技術	11 彼の哲学と現代性	12 ショパン
13 説得力	14 もうひとつの彼	15 むすび

第二部 リヒテルのプロフィール

リヒテルと私(小野光子)		一五
1 出会い	2 リヒテルの家	3 先生の日
4 リヒテルの生活	5 リヒテルの芸術と私	
6 別荘で		

リヒテルの不思議(宮沢明子)		一九
ぼくの小父さん、リヒテル(三谷礼二)		二三
トゥール音楽祭——リヒテルと私——(山口美美)		二三

第三部 リヒテル論(佐川吉男)		二五
-----------------	-------	----

あとがき		二七
執筆者紹介		二六

ら。そのうえリヒテルは、建てはじめたところから見ると、一〇倍以上も国外で、忙がしく……彼の生活は、あのころ、考えていた範囲から大きく踏み出してしまったのである。せつかくの夏も、ザルツブルグや、エジンバラの音楽祭をはじめとして、今年の夏も、八月のはじめに日本へむけてシベリア大演奏旅行に出るとすると、この白樺と松の森深く、川辺ににおうジャスミンに包まれてピアノを弾いて静かに暮す日はどれぐらいあることだろうか。

リヒテルの不思議

宮 沢 明 子

人間の記憶というモノは、たいへん複雑でありまたそれだけになかなか興味深い。私は元来「モノオボエ」のよい人間と自他ともに認めているけれど、その人がどんな顔をしていたか……何を着ていたか……、どんな声でどのようなしゃべり方をしたか……、こんなことならまったく容易に思い出す事ができるのに、こと演奏については、何年かたつて、語ったり書き表わすことはたいへんむずかしい。その演奏がその時の私を心から奪い去るほど夢中にさせたという以外は……。

私は音楽なしには生きていけないほど毎日を音、音、音でくらしている。朝から寝るまで、いかにして音色を創ろうか、音楽をするということの複雑さを考え、音楽について思い、考えることとていっばい……、毎日、かずかずのナマ演奏を聴き、さまざまのレコードを、あるいはテープ

を集中してじっくり聴く。私は好ききらいがとてはつきりしているので、演奏家の場合、興味がわくと、とことんまで探求しないと気がすまない。レコードをきき、その人のナマに接し、それぞれをじっくり味わいながら、古典、ロマン、現代作品と、その人の持ついろいろな解釈、個性、音色を研究することの楽しさは、何ものにも変えられない。

さてこれから、私のリヒテルについての思い出を語ることにしよう。それこそ記憶をたどるわけだ。今から七年前にさかのぼる。一九六三年のことだった。五月まで私はニューヨークで生活していた。ジュリアード音楽院の、若い希望に燃えたピアノ科の生徒たちと、毎日いろいろなスタイルを持ったピアニストたちについて、彼らのレコードを何枚か持ち寄ったり、カーネギーホール、リンカーンセンター、ハンターカレッジと行けるところにはどこであろうと出かけて、むさぼるように自分の目と耳で一生懸命探求していた。あの頃は、私も仲間たちも「グールド病」にとりつかれ、毎日毎日をこの不思議な天才の研究についやし、火花を散らす激論をしながら実に楽しくくらしていた。

その後、私は一大決心をしてヨーロッパへ向かい、しばらくのあいだ静かなジュネーヴで暮らすことに決めた。六月のことである。そこにも、音楽に人生をかけた若い情熱にあふれた仲間たちが幾人かいて、彼らは「グールド」どころか、「神様リヒテル」とまさに「リヒテル病」にか

かっていた。グールドという名前さえ知らない人も何人かいて、私はただただびっくりするばかり……。

私の師事してきた先生は、ほとんどがロシア系で、彼らは「技巧」と「プリリアントな奏法」について実に真剣に教えて下さった。アメリカできいたロシアからのピアニストたち、ギレリス（はじめてきいたのは、東京でだったが）のすさまじいくらいプリリアントな奏法、決して粗雑でないテクニクは、長い間つみ重ねた練習と努力のたまものと、頭のさがる思いで何回か公演に足を運んだ。また若いアシケナージをはじめとして、いろいろな国際コンクールで優勝した若手演奏家たちのそれぞれが、「技巧」、「プリリアント」という言葉そのものの演奏をきかせてくれた。しかし、いつも私の心にふと芽生える疑問があったことを申しあげたい。とにかく、何が欠けていたのだ。その何かとは人間性というか、「ハート」だった。心のある演奏を、私は求めていた。きまつて彼らの公演をきいたあと、静かにレコードをかけ、昔のバックハウス、エドウィン・フィッシャーをきいたものである……。

残念ながら、「リヒテル」のナマにもレコードにさえも、アメリカ時代には接することができず、ヨーロッパにきた私だった。そして、ジュネーヴの公園を散歩しているとき、ふと目に写ったポスター……、七月のことである。黒いただ一列の太い字で書かれた名前こそ「リヒテル」だった。仲間たちの神様として尊敬されている人、リヒテルを、いよいよ自分の目と耳できける！

私は飛んでいった。プレイガイドはもうすでに売り切れを表示していた。やっとのことで天井さじきの席を一枚手に入れて、私はその日を指折り数えて待った。ロシアの第一級ピアニストとして、国家的家宝ともいえるぐらいに大事にされ、なかなか外に出ずに、世界中の音楽愛好家が絶大なる興味を持っているという人。その彼に対する批評は多種多様であり、まったく私は、「自分」に問うよりほかなかった。それというのも、リヒテルについて「神だ」、「天才だ」という人びともいれば、「気違いさ」、「宣伝がこんなに彼のを作りあげたのさ」といって片づける人びともいたからである。

何はともあれ、一九六三年の八月の夜、満員の聴衆でむんむんするヴィクトリア・ホールに私は向かった。開演前十五分、プログラムを開く。まるで音楽会など無視しているのだといわんばかりの表情をしたリヒテルの写真がデンとのついていた。八時半になっているのにベルが鳴らない。まわりは空席ひとつない超満員の盛況。十分過ぎ、二十分過ぎたのにまったくスタートの気配がない。天井さじきには私たちの仲間がいっぱいで、ワイワイさわぎ出している。「キャンセルかな？」と心配した若者たち、そういえば、何度か耳にできた言葉を思い出した。「リヒテルは、ミスターキャンセルといわれるほどよく公演をキャンセルする……」

四十分たつてざわめく人びとの前に、やっと現われたリヒテル、いやいやそうに、カーテンをくぐってピアノに向かい歩いてくる姿に思わずほえんでしまった。はげあがったオデコをハン

カチでなんべんもふき、スタートした。プログラムも変わっていた。バッハの平均律ピアノ曲集から五曲を続けて弾いた第一部、聴こえないといつてもいい過ぎでないほどのピアノニッシモでひき出した第一巻の二十二番、変ロ短調。シーンとした人びとがおたがいに顔を見合わせている。彼は、実に、淡々とひき続けた。演出とか、派手さとか、技巧を見せびらかすなど、ミジンもない。実に地味な奏法だった。リヒテルってロシアに本当に住んでいるのかしら？ まったくほかのロシア系のピアニストたちと異なっていた。変わったピアニストとして、私は第一曲目を緊張と集中できく。プレリユードとフーガを五曲演奏したまま休けいとなった。正直いって、だんだんにねむくなるような世にも淡々とした演奏だった。平均律のなかには、演奏効果のあるブリリアントなものや、メロディックなものがあるというのに、二曲目からあとののは、思い出すことさえ不可能な、ええ、曲ばかりだった。聴衆のなかには、コックリをはじめた人もいたし、「つまらない」といって帰った人びともいた。

休けい後はシューマンの「ダヴィッド同盟舞曲集」。この曲がまた実に淡々としたひき方で演奏された。十八曲からなる長い大作はいともつまらなく演奏され、さっさと楽屋に入ってしまったリヒテルは、アンコールにも答えず、そのままざわめく聴衆を残して音楽会は終了した。

まったく不愛想にピアノに向かい、われわれをまったく無視し「自分」と「音」の世界で淡々と物語っていたピアニスト、このリヒテルを、私はどうにかしてふたたびきたいという気持ちに

かられた。いままできいたピアニストたちとあまりにかけ離れたリヒテル、なるほど、「不思議さ」のあふれた人だった。たった一回のリサイタルをきいただけで、それを言葉にするむなし行為を決してしなくなかったし、私は、まずレコードを集めることに決めた。本当かどうかいまでも首をひねっているけれど、四十分も開演が遅れた理由は、頭を洗いたかったからだと言目の新聞に報道されていた。そして演奏会の批評は、どれもこれもケチコンケチコンにたいてあった。

一九六四年になると、あらゆる音楽雑誌、新聞がリヒテルについて書きたてていた。ブームであった。そして、切符を買って待ったに「キャンセル」。ミスターキャンセルとしてリヒテルと、もうひとりミケランジェリがいた。

こうして一九六三年の八月以来、ついに自分の目で耳でふたたびリヒテルの演奏を聴くことができず、こんにちに至ってしまったが、今度は日本でじっくり聴けるというすばらしいチャンスに、私はわくわくしながら待ち望んでいる。

一九六四年のある日、BBC放送をきいていたら、ふとリヒテルというアナウンスに、飛びあがるほどうれしくなり、そのリサイタルをきく。第一曲がシューマンのノヴェレッツへ長調だった。どんな演奏をするだろうか？ 見ることができないけれど、それこそ全神経を集中してきく。五分たらずのその曲、およそ生まれついでからこんなに五分という短さが十分満たされ、有意義

に感じられたことがなかったほど、実に見事な演奏だった。彼の演奏には何かコトバでいえない、「不思議さ」と「マ」があった。

ジュネーヴで聴いたリサイタルは、まず第一に「まわり」が騒々しくじつくり静かに味わえるふんいきではなかった。そして、あまりにリヒテルについてのパブリシティーが多過ぎて、自分の目と耳で確かめる以前にひとつの「リヒテル像」が創られざるを得なかった。これも、現代の悲劇といえようか？ リヒテルは、実に淡々と演奏する。時には、無難作に、あまりに不愛想にきこえ、みられるであろう。しかし、彼はりっぱに「自分の節」を持っている。むき出しのものというより、「秘めたもの」を感じる。そして難曲を難曲と感じさせない。リヒテルの演奏には、必ず「抑制」がある。セーヴして押えたというところに、にじみ出る魅力がある。決してではない、むしろたいへん地味である。何枚かのレコードをきき出した私は、彼によって改めて考えさせられたのである。演奏技巧は音楽のための手段であり、決して目的でないという真理を、彼は如実に示してくれているのである。ハツタリすらないというところに、ますます私はリヒテルを見直し、大きな興味をいだいた。もしかしたら、彼の演奏は、計算を出さないという計算によるものかもしれない。それだけに底知れぬモノを感じるのだ。

彼は、私がこれまたたいへん同感するところの、レコーディングのツギハギをきらう人と聞いた。だからはっきりと解るミスをちゃんと残しているレコードも何枚かあることが、それを証明

できよう。彼は、それだけ「音楽性」を重要視するのであろう。音楽というモノは時間芸術である。それゆえに、違う瞬間にひかれたモノを、同じ時間の流れとして構成することは、時間芸術である音楽に対する冒瀆である。私は、元来、レコードによるピアニストとステージでのピアニストを、それぞれの場に区別して考えている。そして、レコードに「語り」を、ステージにはまた「何か」を示す演奏家こそ個性あるすばらしい人と考えている。ナマはよいが、レコードになるとまったくよくない……という人は、私にとって何の興味もないアーティストである。リヒテルに関して、あまりにまわりがさわぎ過ぎて「真価」が正しく見られないことが残念である。宣伝がオーバーだったり、よけいなかざり文句が多かったり……

私の手元にあるリヒテルのレコードは、まずハイドンのソナタハ短調と変ホ長調で、リヒテルのハイドンに表わされた構成の力を高く評価したい。一見、図太くきこえる彼の奏法は、じつくりときくと実にこまやかである。

私は、彼のシューマン、シューベルトがたいへん好きである。シューマンについては、リヒテルのテンポのとおり方について考えさせられる。明らかに、生理的テンポ感覚に順応してテンポを自動的に修正していることが感じとれる。だから、聴く者にとってどんなに多少のテンポの差があっても、自然にひとつの流れとして感じさせるのである。この彼の持つ「特技」がシューマンを弾く。シューマンを語れるピアニストといっても過言でないと思う。

私の聴いたシューマン作品の中で「ピアノ協奏曲」に始まり、トッカータ、幻想曲、幻想小曲集、フモレスト、ノヴェレッテ、アベッグ変奏曲、ピアノソナタ第二番、バビオンはそれぞれ実にすばらしい。何度もくり返されるメロディーがそのたびに微妙な変わり方をしてることから、底知れぬリヒテルの「魔法」を感じるのだ。

これと同じことが、シューベルトをきくたびに考えられる。「さすらい人幻想曲」をきいてから彼のシューベルト奏法にすっかり心を奪われ、ソナタイ短調、レントラー、楽興の時、即興曲を集めた。リヒテルの魔術師的演奏法、彼のテンポのくずし方、休止符を必ずしもメトロノームと一致させない点、幅広いハーモニーの音、決してくどくないメロディーの歌わせ方、これらは教えられたモノでなく、これこそリヒテルでしか考えられないモノと信じている。

リヒテルというピアニストに関して、いろいろ探求している内におそらく彼は何年に一度しか生まれない「大切なピアニスト」なのだとその存在をあらためて認識した次第である。「考えてひくピアニスト」「奥に秘めたモノをたえずいだき、ピアノに向かう人……」その彼のひくショパンのレコードをきくたびに感じる「味気なさ」しかし、そこに立派に表わされた「せつなさ」とは、いったい何なのだろう……もともと、私はバラード第四番とスケルツォ第四番しかきいたことがない。ロマン派の名作品はあまりに数多く演奏されていて、それだけにきく人を本当に感動させることはたいへん難しい。どんな演奏家だってすべての作曲家を満足にさせることはでき

ないし、その人が「人間」であればあるほど、つまり「知性」と「心」を伴った演奏家ならそれだけ、ロマン派にいとむことは至難の業といえよう。以前、リヒテルが語ったフレーズを思い出す。「現代曲、古典作品は知性で演奏できる。しかし、ロマン派はあまりに難しい。あまりにもひかれてしまっていて……情感が伴わなければ演奏できない。全身全霊をかけねば……ムズカシイことだ」……何と正直な言葉であろう。まったくそのとおりだ。リヒテルのレコードを聴くたびに思うことはいくらいてもあきないということ、そして疲労感を覚えたといっても、それは快感を伴った疲れとしか感じられないのである。

知性で弾くといって片づけるにはあまりにも名演と思えるカラヤンとの共演によるチャイコフスキーのピアノ協奏曲。あの、実にさまざまなピアニストによって演奏された名曲中の名曲を、「新鮮」と「深み」でいんどんだリヒテルに、私はますます尊敬の念を大にしたのである。

ラフマニノフについては、ただのコトバで語るのが申しわけないほど「自分のモノ」にしつくしてあまりに自然にラフマニノフの音楽が躍動していると感じるのは、私ひとりではないと信じる。ピアノ協奏曲第二番、バイロン・ジャニスの盤とともに、私の大切な一枚となっている協奏曲第一番とプレリユードの数曲……。

この偉大なるピアニスト、リヒテルはベートーヴェンの作品を何枚かレコードにしている。私が聴いたのは、まず、ピアノ協奏曲第一番、ソナタ第七番、八番、十二番、十七番、二十二番、

二十三番、そして八つのバガテルで、このうち第七番と二十二番のソナタについては、シャッポを脱いだといいたい。とにかく、ベートーヴェンを演奏することは、一朝一夕でできることではない。いったい、ベートーヴェンをすばらしく演奏する人とはどういう演奏家をさしているのだろうか？ リヒテルのシューマン、シューベルトで示している「マ」と「テンポ」の魔術が、ベートーヴェンに接するところなるだろうか……レコードを聴くだけではその人の演奏についてすべてを語ることなどとてもできるものではない。リヒテルに関してはベートーヴェンだけでは彼の持っている「不思議」さはわからないし、ベートーヴェンを研究するたびに、底知れない深さと骨組みを感じ、とてもことばなどで文章に表わすことは危険だと思う。しかし、いろんなベートーヴェン奏法が存在しているこんにち、リヒテルの姿勢もおおいに私のベートーヴェンへの勉強になったことを申しあげたい……

こうして、リヒテルについていろいろ書いてきた私はいま、どうしても使いたい、あてはめたい言葉にぶつかってしまった。「天才」……芸術にいとみ、芸術を創造し続けるたっさんの天才がこの世に存在している。ただ、いたずらに「天才」というのではない。この言葉の持つ意味、そして天才にもいろいろあるのだ。ホロヴィッツの天才と、グールドの天才はそれぞれ異なる。天才とは、パッとひらめくものをたえず表出する才能ある演奏家、たとえばホロヴィッツ、それ

ともすばしっこい、すさまじい回転のよさ、すなわち、グルンドをいうのか……それならリヒテルは？ 彼はそんな簡単にいい切れないものを持つ天才だと私は信じている。

限られた時間の中で、いいきれないものを持ったピアノリスト、たいへん複雑ないろいろな要素を持ちながらも、その場その場に全身でぶつかりいどむことのできるピアノリスト、それゆえに、出来、不出来の激しい人なのかもしれない。あのジュネーヴのリサイタルは、決してベストコンディションではなかった。そして、そこには底知れない未知数のモノが奥深く秘められていたのだらう。あの時、リヒテルなんてたいしたことない……と一語に片づけてしまった人が、きっとなんんかいたに違いないが、それでも高まった「リヒテルブーム」は彼の天才的な何かを信じることからじまったのではないだろうか？

彼のレコードの何枚かには、実況演奏が堂々と収められている。レコードのための演奏でなく、その時に全身全霊をかけたリヒテルの「いどみ」と「心」が実に見事に収められている。そのほとんどが、「情感」にあふれ、心の動き、気まぐれさに満ちていて、これらがあのようなみごとにシューマンとなり、シューベルトとなり、そしてラフマニノフに達するのだとはつきり理解できる。リヒテルのことを「お天気屋さん」、「気むずかし屋」というのなら、それは、彼が、芸術

に対し実に厳しく、また自分に対してのかけがえのない愛情と自信に燃えているからだと思う。

その偉大なる人間リヒテルをわが国に迎え、じっくり聴くことの貴重さと期待をひしひしと感

じながら、私はふたたび、そして音楽にいどむあいだじゅうくり返し考えたい言葉を思い出した。リヒテルのいったフレーズ「音楽、演奏についてコトバで語ることのむなしさ、むずかしさよ……。むしろ、無用かもしれない。音楽は聴くか、ひくものだ。そのほうが、はるかによく理解できるでしょう……」

されたと思うが、原稿に目を通してくださった野村光一先生に、心からお礼を申し上げたい。

一九七〇年八月

小野光子

執筆者紹介

小野光子^{おののてるこ}

声楽家。ソプラノ。東京音楽学校（芸大）卒業。関種子、木下保、ヴァーハーバーニヒ、関鑑子に師事。一九五八年よりチャイコフスキー名称モスクワ国立音楽院に留学、ニーナ・ドルリアク教授の教えを受け、一九六〇年帰国。その後、四回のリサイタルでロシア・ソヴィエトの歌曲作品を日本に紹介、第三七回毎日ゾリスTEN出演。一九六五年よりソ連各地で演奏活動を行ない、一九六八年帰国。

松岡節子^{まうおか せつこ}

早大露文科卒業。長年、全国労音事務局に所属して、おもにソヴィエトより訪ずれる音楽家の通訳として活躍した。

宮沢明子^{みやざわ ありこ}

ピアノリスト、神奈川県に生まれる。井口愛子氏に師事、桐明学園「子供のための音楽教室」、桐明学園音楽科卒業。一九五五年全日本学生音楽コンクール全国第一位入賞。一九六一年渡米、一九六三年ジュネーブ国際コンクール入賞。帰国以来、全国各地でリサイタル、交響楽団と共演。毎年欧州で公演活動を行なっている。日本コロンビア、キング、フィリップスで録音。

三谷礼二

一九三四年、東京に生まれる。学習院大学政治学部卒。日活映画宣伝部勤務。かたわら三善晃らとの独自の劇音楽活動が続ける。六四年から二年、欧米で生活、その経験が自由劇場ほかの小劇場運動、20世紀の音楽をたのしむ会、東京室内歌劇場などを生む。六九年再渡欧、現在はオペラの制作、演出を中心に、新しい劇音楽芸術を志向。

山口英美

一九〇六年、東京に生まれる。一九二三年から二六年までパリでフランス語研究。一九五四年から六年間NHK国際局勤務。一九六〇年、国際文化交流を目的に「山口ビュロー」を設立。オリビエ・メシアン招へい、パリ・ユシエット座の「スペクトル・イオネスコ」日本公演製作など。音楽、演劇に関する随筆多数。

佐川吉男

一九二六年、青森県に生まれる。一九四九年旧制東京高校理科を卒業のち、早大演劇科を中退。在学中よりレコード雑誌「ディスク」の編集長として評論活動をはじめ、チェコを中心とする東欧音楽とオペラ演出史を専攻するに至った。現在、武蔵野美大教授、尚美高等音楽院講師、日本チェコスロバキア友好協会常任理事。

762
0



朝日現代叢書
幻のピアノリスト

リヒテル

一九七〇年八月二五日 初版印刷
一九七〇年九月一日 初版発行

定価 700円

編者

小野光子
佐川吉男

発行者

原雅久

発行所 株式会社朝日出版社

102 東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ九
電話代表〇三二六三―三三二一

振替口座東京四六〇〇八

三秀舎印刷 親愛製本